

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月28日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21320022

研究課題名（和文） アジア・ディアスポラの転向体験——接触空間と植民地主義

研究課題名（英文） The Conversion Experience of Asian Diaspora: the Contact Zone and the Modern Colonialism

研究代表者

緒形 康 (OGATA YASUSHI)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：40194427

研究成果の概要（和文）：帝国日本の国民統合が進んだ1930年代、植民地においてそうした国民統合から疎外された人々をアジア・ディアスポラと名付けた上で、彼らが既存の地域や社会から引き裂かれた転向という受難の体験を、日本人とアジア・ディアスポラの共通体験と捉え直すことで、植民地近代の問題群に新しいアプローチを行った。アジア・ディアスポラの転向体験を再発見し、これまで親日派、反革命の名の下に埋もれていた多くの歴史的事実を発見し、その意味を問い直すことによって、自民族中心的な東アジアのナショナリズムを脱却する方法的視座を得た。

研究成果の概要（和文）：In this study, we focused on the Asian diaspora who had been alienated from the national integration in the Japanese colonial empire in the 1930s. In most preceding studies, a large number of historical facts have been hidden under the name such as “pro-Japanese” and “counter-revolutionary”. And this study provides a new approach. Although the Asian diaspora were torn from their existing communities and societies, and it caused the phenomenon of “conversion”, but we also should emphasize that it was the common experiences of the Asian diaspora also the Japanese. From this angle, we found out various issues of the modern colonialism in East Asia. The result of our study clearly shows that we gained a new perspective to overcome the ethnocentric nationalism in today’s East Asia .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2010年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	5,400,000	1,620,000	7,020,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：ディアスポラ、接触空間、植民地主義、帝国、1930年代

1. 研究開始当初の背景

(1) 1930年代帝国日本における転向は、共同研究『転向』が「近代日本社会の構造の総体的な把握に失敗したことから生まれた思考変化」と名付けて以来、多義的な意味が注目されるようになった。それは、台湾、朝鮮、満洲国など植民地広域圏の「親日派」「漢奸」の動きとも密接に関連していたのである。転向体験が、共産革命から伝統日本への回帰として起こると同時に、台湾人と朝鮮人の土着文化からの切断や、満洲国に移住した日本・台湾・朝鮮の人々のアイデンティティー危機という形でも起こったことについて、研究が進められてきた。

(2) 本研究は、こうした研究史を踏まえながら、帝国日本の国民統合が進むにつれて社会や地域から疎外されたこうした人々をアジア・ディアスポラと名付けた上で、転向体験を国家や社会から地域・個人のレベルへと拡大し、1930年代帝国日本における転向という受難の体験を、狭義の日本人とアジア・ディアスポラの共通体験として検討を加えようとした。

2. 研究の目的

(1) グローバル化する現代世界にあって、東アジアは人やモノが激しく移動するにもかかわらず、国家、民族間の境界が硬いシステムを構築している地域の一つである。東北アジアにおける朝鮮族の移住は国家間の融和をもたらす方向には向かっていないし、グローバリズムの潮流にもかかわらず、現代日本はますます自閉的な社会に変貌しつつある。

(2) 本研究は、グローバリズムとナショナリズムがこのような奇妙に並存している理由が、1930年代帝国日本の転向体験の内、アジア・ディアスポラの体験が捨象された事態にあるという仮説の下に行われた。そして、アジア・ディアスポラの転向体験を再発見することで、過去の転向体験そのものを豊かにし、こうした受難の体験の中に、現代東アジアの混迷するナショナリズムを乗り越えるような手がかりを見出すことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) アジア・ディアスポラの使用言語の複数性（植民地漢文、中国白話文、台湾話文、ハングル）とテキストの異種混濁性の言説分析を行う。

(2) アジア・ディアスポラの転向体験を、書かれたテキストではない、語られた歴史（オーラル・ヒストリー）のレベルから再構築する。

(3) 言説分析とオーラル・ヒストリーを手がかりに、1930年代の転向体験が含意している植民地主義の理論的再検討を行う。

4. 研究成果

(1) 研究初年度である2009年度は、アジア・ディアスポラ研究を進めるための研究チーム（「言説分析チーム」「口述歴史チーム」「理論動態チーム」）を立ち上げた上で、過去のアジア・ディアスポラに関する研究史を整理し、5月に、小コロキウム「アジア・ディアスポラの転向体験に関する研究史の整理」を開催した。10月には、中国社会科学院文学研究所の楊義所長をお招きして、近代中国におけるディアスポラ文学の諸相につき、シンポジウムを行った。そうした成果の上に、2010年1月と3月、高雄市、ソウル市においてアジア・ディアスポラに関するオーラル・ヒストリー調査に従事し、1930年代の転向体験に関する新たな歴史事実の発掘を行った。

(2) 研究2年目である2010年度は、「言説分析チーム」「口述歴史チーム」「理論動態チーム」がそれぞれ個別研究を進めた上で、10月・11月に、華東師範大学思勉人文高等研究院の許紀霖、楊国栄の二教授をお招きして、1930年代の東アジアにおける共産革命や近代化の動きと転向との内在的関連をめぐって共同討議を行った。また、そうした研究や討論に並行して、2010年5月に、韓国釜山市においてアジア・ディアスポラに関する社会調査に従事した。

(3) 研究最後の2011年度は、3年間の共同研究の総括を行った。以下に、その成果をまとめた報告書の目次を掲げる。

序：植民地近代とアジア・ディアスポラ
の思想文学（緒形康）

第一部：近世(early modern)における植
民地主義と言説空間

「一六世紀の海港都市「堺」表象について
の覚書」（樋口大祐）

「前近代における怪異譚の思想変節
をめぐって」（門脇大）

第二部：植民地近代のアイデンティティー
「龍濟光政権期の広東地域エリート」（宮
内肇）

「海を渡る源義経一貴公子の悲劇とその

語り手の系譜一」(藪本勝治)

「翻訳から見る昭和の哲学—京都学派の
エクリチュール」(上原麻有子)

「楊千鶴の日本語創作をめぐる」(濱田
麻矢)

第三部：植民地近代からする「転向」現象
再考

「一九三〇年代の封建遺制論争、資本主義
論争におけるアジアの影」(緒形康)

「幕末勤皇歌研究と時局」(田中康二)

「田辺元『懺悔道としての哲学』における
転回・理性批判の射程——ホルクハイマー/
アドルノ『啓蒙の弁証法』との比較試論——」
(嘉指信雄)

「白先勇『孽子』と台北——移ろいゆく都
市の記憶」(小笠原淳)

(4) (3)の報告書の内容に見られるように、本
研究は、当初の計画であった1930年代とい
う時代設定を大きく拡大して、16世紀以来の
アジア・ディアスポラの転向現象を中心に、
植民地近代の総体的問題群を取り扱うこと
ができた。

(5) 本研究を通じて、16世紀から1930年代
帝国日本の思想史研究が、宗主国日本と旧植
民地地域でそれぞれ別個に進められてきた
潮流に対して、それら相互の思想連関を重視
した新しい方向性を示すことができた。

(6) すなわち、日本の過去の転向研究は、社
会システムとの諸関係において考察された
が、それらが注目したのは、天皇制ファシ
ズムへと収斂する国民国家体制の内部構造に
過ぎなかった。植民地広域圏の多様な社会シ
ステムという外部構造が日本の転向思想に
与えた影響については十分な考察がなされ
なかった。本研究は、広域圏の植民地問題に
着目することで、日本の転向体験が持つ内部
と外部の異種混雑的な性格を発見したこと
に第1の特色がある。

(7) 他方、韓国、台湾、中国大陸の1930年
代研究は、1945年以後の国家や地域の自立
を準備するような、ファシズム日本との対抗
思想の研究に力点を置き、転向体験は親日、
反革命の現象に過ぎないとして深い分析を
加えなかった。しかしながら、植民地的主体
にとって、抵抗と服従、被支配と支配の構造
は二項対立的なものではなく、非転向の転向
がありうると同時に、転向の非転向がありえ
た。アジア・ディアスポラの転向体験は、反
体制的な革命運動以上に、革命的な要素を内
包している可能性がある。このような意味で
の広域圏の転向体験の発掘と評価に、本研究
の第2の特色がある。

(9) この共同研究を通じてアジア・ディアス
ポラ思想の営為を明らかにすることで、20
世紀の東アジア思想通史が1945年で分断さ
れている現状を打破する可能性を提示でき
た。ここで1945年の分断という意味は二重
である。第1は、日本社会の研究が1945年
前後での断絶を強調するのに対して、植民地
主義の立場から連続的な視点に基づいた思
想史モデルを提供できることである。第2は、
1945年を境に東アジア思想史がそれぞれの
国民国家単位の記述に単線化される現状に
対して、東アジアの思想連鎖に基づいた国民
国家を超える思想史を執筆することが可能
になることである。

(10) 狭隘化したアジアナショナリズムを克
服するヒントが、アジア・ディアスポラと転
向体験に関する本研究の成果には含まれて
いるといえることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計17件)

- ① 樋口大祐、一六世紀の海港都市「堺」表
象についての覚書、アジア・ディアスポ
ラと植民地近代(科学研究費補助金(基
盤研究(B))成果報告書、査読有、2012、
11-26
- ② 濱田麻矢、楊千鶴の日本語創作をめぐる
て、アジア・ディアスポラと植民地近代
(科学研究費補助金(基盤研究(B))成
果報告書、査読有、2012、97-107
- ③ 緒形康、一九三〇年代の封建遺制論争、
資本主義論争におけるアジアの影、アジ
ア・ディアスポラと植民地近代(科学研
究費補助金(基盤研究(B))成果報告書、
査読有、2012、111-125
- ④ 田中康二、幕末勤皇歌研究と時局、アジ
ア・ディアスポラと植民地近代(科学研
究費補助金(基盤研究(B))成果報告書、
査読有、2012、127-148
- ⑤ 嘉指信雄、田辺元『懺悔道としての哲学』
における転回・理性批判の射程——ホル
クハイマー/アドルノ『啓蒙の弁証法』
との比較試論——、アジア・ディアスポ
ラと植民地近代(科学研究費補助金(基
盤研究(B))成果報告書、査読有、2012、
149-164
- ⑥ 緒形康、近代世界史における多民族国
家——中国の実験(プラセンジット・デ
ュアラ著)、グローバルヒストリーの中
の辛亥革命——辛亥革命100周年記念国際
シンポジウム神戸会議パンフレット、財

- 団法人孫中山記念会、査読無、2011、9-13
- ⑦ 緒形康、辛亥革命研究と戦後日本の歴史学、辛亥革命与亚洲——東亜文化交渉学会第三届年会、華中師範大学中国近代史研究所・東亜文化交渉学会、査読有、2011、63-65
 - ⑧ 緒形康、現代中国のイデオロギー状況と『北京コンセンサス』——誰が文化を主導するのか、国際問題、査読有、No.602、2011、5-14
 - ⑨ Kazashi Nobuo, Action-Intuition and Pathos in Nishida and Miki: For the Invisible of the Post-Hiroshima Age, or Irradiated Bodies and Power, Japanese Philosophy Today, Diagenes, No227(57-3), 2011,89-102
 - ⑩ 田中康二、県居派・江戸派・桂園派の歌人たち——江戸時代中・後期、和歌史を学ぶ人のために、査読無、2011、178-196
 - ⑪ 田中康二、幕末の江戸歌壇——一枚刷『東歌歌仙窓の枝折』をめぐる、国語と国文学、査読無、88巻5号、2011、48-62
 - ⑫ 緒形康、現代中国の儒教運動——蔣慶の政治儒学に見る文化主権の諸問題、ICCS現代中国学ジャーナル、査読有、第2巻第1号、2010、221-228
 - ⑬ 緒形康、自由主義の中国化、中国——社会と文化、査読有、第24号、2009、335-348
 - ⑭ 田中康二、『土佐日記』主題論の展開——『土佐日記解』秋成序文の受容、江戸の「知」——近世注釈の世界、査読有、2010、129-147
 - ⑮ 嘉指信雄、ジェイムズ根本的経験論の生成——哲学における新たな結晶化の中心、愛知、査読有、No21、2009、3-23
 - ⑯ Kazashi Nobuo, The Passion for Philosophy in a Post-Hiroshima Age: Rethinking Nishida's Philosophy of History, Frontiers of Japanese Philosophy: Confluences and Cross-Currents, Vol 6, 2009,129-140
 - ⑰ 濱田麻矢、朱天心『古都』与胡蘭成的美学 励耘学刊文学、査読有、第9巻、2009、157-166

[学会発表] (計3件)

- ① 緒形康、世界史的解体与再認識(招待講、演)、思勉人文講座第63講、2010年12月21日、関行校区人文楼5303学術報告庁、華東師範大学思勉人文高等研究院
- ② 樋口大祐、16・17世紀日本のキリシタン受容と転向、世界における日本学研究の趨勢と連携、2010年10月17日、北京日本学研究センター
- ③ 樋口大祐、「一國中世文学史」を問い直す、文学史の近代、古典の近代、2010年10月5日、韓国成均館大学校

[図書] (計7件)

- ① 緒形康編、フェデックス キンコーズ・ジャパン株式会社、アジア・ディアスポラと植民地近代(科学研究費補助金(基盤研究(B)))成果報告書、2012、181
- ② 田中康二、新典社、国学史再考——のぞきからくり本居宣長——、2012、256
- ③ 樋口大祐、吉川弘文館、変貌する清盛——『平家物語』を書きかえる——、2011、222
- ④ 濱田麻矢(共訳)、夢と豚と黎明——黄錦樹作品集、2011、229-276、313-361
- ⑤ 田中康二、汲古書院、江戸派の研究、2010、560
- ⑥ 田中康二、ペリかん社、本居宣長の東大東亜戦争、2009、271
- ⑦ 樋口大祐、森話社、「乱世」のエクリチュール、2009、392

6. 研究組織

(1) 研究代表者

緒形 康 (OGATA YASUSHI)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：40194427

(2) 研究分担者

- ・ 嘉指 信雄 (KAZASHI NOBUO)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：20264921
- ・ 田中 康二 (TANAKA KOHJI)
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：90269647
- ・ 樋口 大祐 (HIGUCHI DAISUKE)
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：90324889
- ・ 濱田 麻矢 (HAMADA MAYA)
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：90293921